

道路と道德の關係

井上弘道

はしがき

私は本稿に於いて、道路と云ひ或は道德と云ふ場合に用いられる中心的概念たる道を云ふことに就いて、その語源的研究を行ひ、しかして道の集團性を立證し、更に進んでは道路のもつ道德生活乃至は精神生活に於ける重要意義にも觸れてみたいと思ふ。従つて、道路のもつその他の重要性、例へば軍事的、産業的、教育的などの文化的種類の事項は、本稿からは別にをかれるが、それを否定しようとするものではない。此等の事項は別の人々が多く取扱はれた問題であると云ふ意味で、此處には取扱はないと云ふまでのことである。

一

道路は形而下的存在であつてそれは技術家の問題對象であり、道德は形而上的存在であつて、それ

は道徳家とか精神科學者の研究對象であるが、故にこれらを混同し若しくは同一平面に於いては論ずべからざる性質のものであるかの如く考へる向がある。然し、われ／＼がかゝる反目的立場から離れて冷靜に考へるとき、道路も道徳も共にわれ／＼の廣い全體としての社會生活に於ける相關的實在なることに氣付くのである。若し、これら兩存在をば全然異種のものなるが如く、言葉を換へて言へば截然區別さるべき精神界物質的と云つた夫々別世界的存在の如く思惟する場合に於いては、われ／＼の社會生活はその統一ある生活、秩序ある活動は不可能にならなければならぬ筈である。われ／＼が此の兩者を相關聯せしめて同一平面にをく場合に於いて初めて、眞の道路の意義と眞の道徳の意義とを把握し得るのであつて、若しさうでなかつたならば道路美化とか道路愛護とか云ふ主張なり或は運動なりは、その立脚する根本原則を失ふことになるであらう。この道路と道徳の共通した根本原理を理解し得てゐる場合に於いてのみ、道路の改良と云ふことに一つの重大なる理由を求めることが出来るのではあるまいか。

今われ／＼は道路と道徳とが共に「ミチ」と云ふ音で以つて其の意味が表現せられてゐることに着目することによつて研究の勞を進めることにしたい。先づ手取早く大言海を開けてみる。そのときわれ／＼は、道と云ふ項目に於いて種々なる解釋法を見出すのであるが、

(一)又ハ路地上ニ往來スベク拓キ設ケタル所。人ノ行來スルニ依リタル所。

(二)事ノ理ノ人ノ行ヒモテ行フベキモノ。人倫日用ノ間ニ行フベキ所ノワザ。

と云ふ、今問題の道路と道德の同一概念を確認し得る。更にかゝる概念を古文献に求めることも可能である。萬葉集長歌に「カクバカリスベナキモノカ世ノ中ノ道」と云ふのがあるが如く、古くから道路と道德とは同一表現に於いて使用せられてゐることを立證し得るのである。勿論、大言海が説明してゐるが如く、一がその語原をなし二がその轉化の如く考へられないこともないが、然し此の問題よりも更に重要な問題は、道路も道德も共に同一表現たる「ミチ」と云ふ稱呼に値した理由である。このとき、われ／＼は原始人の特異な心理状態を究明する必要がある。

二

先づ最初に、われ／＼は「ミチ」と云ふ稱呼の古代的概念を研究しなければならない。文字なかりし時代に於ける人間の發する音は充分われ／＼にとつて關心的である。理解のため便宜上、先づ日本語大辭典を開いて見よう。

「ミチ」「ミ」は「マ」に通ずる接頭語で原語は「チ」である。

と説明されてあるが、更に賀茂眞淵大人は國意考に於いてこの「ミチ」の「ミ」は「御」であると註釋を與へてゐるが、何れにしても、「ミチ」の場合問題にすべきが「チ」であることをわれ／＼に教示してゐるに變りはない。

こゝに於いて次の問題として、われ／＼はこの「チ」に就いての意味、更にその語原的意義を明瞭にす

ることが必要となる。これに對して本居宣長大人は古事記傳に於いて、「チ」は男子を尊びていふ名なり。

と解釋してゐるが、これは未だ充分に説明したものは云い得ない。何故ならば、樹木の精靈のことを上代人は、ククのチと呼び、女神を稱する場合に於いても同様、チを發音して姫靈即ち、ヒメチと呼んでゐるからである。而も此れに對して男神は彦靈と書いて、ヒコチだからである。

それ故、われ／＼はこの「チ」の表現するところの概念にもつと深淵な意義を見出さなければならぬ。しかも、それは可能であり、そしてそのことによつてのみ初めて道の意義を正解し得るのである。此の「チ」は前掲日本古語大辭典によれば

チ(靈)主(カミ)神(頭)の力に相當する原語である。轉義により血乳父・鈎・風等の意を生じた。「チ」と云ふ語の系統は之を南方諸語に求めねばならぬ。ポリネシア語に於ては今も神又は君長を表現するに「ツツイ」又は「チイ」といふ語を用ひるのである。

と述べられてある。これは大體に於いて正しい解釋とされるだらうが、只われ／＼として注意をしてをかなければならないのは、松岡靜雄氏が轉義により血乳父などの意を生じたことと云はれることである。即ち、この場合の轉義と云ふことは非常に誤解を生じ易いと云ふことである。われ／＼が原始人のあの特異の心理作用を理解するならば轉義と云ふ表現法を用ひないで、血乳父などは靈主神と同一的存在であつたと云はなければならぬだらう。上代人は神主・血父・風などを表現するには

「チ」と云ふ發音以外にその表現法を知らなかつたのである。かゝる論争はしばらくをいても「チ」が神聖概念の表現たることは理解し得られる。大言海に於いてはこれを平易に

ち靈（持ノ約）神人ノ靈又徳ヲ稱へ贊メテ云フ語野之靈（野槌）水靈（尾呂靈）蛇（ナド）ノ類ノ如シと説明してゐるが、かゝる事例は多く擧げることが出来るであらう。

これを要するに血乳水風は「チ」であり靈なのである。人間の身體から血が流れ出て了ふとき、彼は死す。即ち血は人間を生かしてをる靈であり力なのである。乳は幼兒を生かすところの魔力をもつてゐる。「コチ」とか「ハヤチ」とか即ち東風とか疾風とかは共に風の偉力を表現せるものである。東風は草木に花咲かせる魅力をもつてゐる。疾風は人家を倒し草木を倒す魔力をもつてゐる。水も同様、死者をよみがへらし、火災を鎮壓する偉力をもつてゐる。大言海が「チ」をば持の約としてゐるのは留意すべきである。即ちそれは、魅力魔力偉力などの力を持つてゐる意であらねばならない。持の約とは力持ちの約である。それ故、血も、風も、乳も共に同一の發音で以つて表現されるに値する一種の力のものであつたのである。もつと明瞭に表現すれば「チ」はまさしく神なのである。

三

上代人はこれらの魔力的存在を神として崇拜してゐた。私は茲で少しく、原始人の心理に就いて即ち彼等がかゝる偉力的存在をすべて神として畏敬してゐる事實を申述べてをきたい。大倭神社

註進狀によればその神社の祭神の一體なる御歳神は實に八握嚴稻を神體とする稻神なることを發見するのである。説明すれば稻が即ち神として祭祀されてゐるのである。更に龍田風神祭に於ける祭神は天乃御柱乃命、國乃御柱乃命であるがこれも亦風を神格化したものである。また、祝詞祈年祭の中に出て來るところの座摩乃御巫が奉仕する生井榮井津長井など三井は即ち水を與へる井が神として奉祀されてゐる。

かくの如く、上代人にとつては事實、力のものはすべて神として奉祀され祭祀されてゐたことを發見し得るのである。これと同様なことは當然道に就いても云はれなければならぬ。萬葉集を翻いてみると、われ／＼はその中に數多く見ることであるが、一例を擧げるに「ハナノ衢ニ夕日ト」になど歌つてゐるのは、道を以つて一種の力的存在なりと上代人が思惟してゐた證據とすることが出來よう。

更に道を對象として禮拜し儀式的祭典を彼等が營んでゐたことを指示するならば、道は神なりとの主張を確立するに役立つであらう。神祇令の義解の道饗祭の條に

講卜部等、於京城四隅道上而祭之、言炊令鬼魅自外來者不散入京師、故預迎於道而饗過也

と説明されてあるが、これだけでは多くの人々が誤解したが如く、疫神を「ワイロ」で以つて撃退することの如くに考へられる。しかし、かゝる見方は此の祭の本來的性質を理解しないものであつて、道は神なりとの上代人の心理を蹂躪したものと云はなければならぬ。われ／＼は茲に於いてその祭

に奏上されて來た祝詞を引用しなければならぬ。上代人は此の祭の祭神たる道なる八衢比古八衢比女に次の如く祈願してゐる。

根國底國與里麤備疎備來物邇相率相口會事無氏、下行者下乎守理、上往者上乎守理、夜之守日之守爾
守奉

と。相口會事無氏と云ふ言葉が表示するが如く、疫神などと妥協することなく疫神よりわれ／＼を守りたまへと云ふのである。彼等は、道なる神に種々なる供物をしてその神の活力を充實させるのである。疫神を排撃してもらうために、別な言葉で云へばその道の上を通つて京師に進入する彼等の社會生活を脅威する力を排撃するだけの偉大なる神秘的力を道なる神に充分發揮してもらうために、道を祭るのである。四隅の道上に於いて祭之とあるのを見ても——尤もこれが後人をして他から進入する鬼魅を御機嫌とる祭の如く誤解せしめた原因の一をなしてゐるのだが——道神と云ふ別格の神社にをさまつたものを祭るのではなくして道それ自體を神として祭つてゐたことが理解出来るのである。日本人が今日、道路祭を重大視しないのをあやしむ。

かくの如く、最も古い思考形態に於いては、道自體が神と信じられてゐたのであるが、時間的經過と共に道路自體を稱呼しないで道と神とが遊離して考へられるやうになつた。道の神、塞の神、道祖神などと云はれ、夫木抄などに於いても、

そねたちに祈れる幣のおもひとは

手向けの道の神や知るらん

などと歌はれるに至つた。更に、義解が誤解をしてゐるが如く、後には全然その意味を失ふやうにもなつたが、しかし他方旅行安全の守神などとされることにもなつた。

しからは道路が神祕的な力をもつものであり、従つて上代人に於いては神と觀念されてゐたのは何故であらうか。この答を與へるための長い説明をこゝに行ふことを差控へて、宗教社會學が與へて呉れた結論をもつて來よう。即ち道が神であると云ふのは、それが集團的關心事であり集團的所産だからである。實際、道路を誰れが設けたかと云ふことは起源的に於いて、すべての人々にとつて不可解な事項に屬する。そして又、その後にも道路は集團的關心事によつて建設されてゐる。個人的な利益や野心ではない。上代人の集團生活に於いて、所謂人々と云ふべき無名の人々が彼等の生活のために山谷或は草野に足跡を印した處が道なのである。上代人にとつて、彼等の現在の所以外は生命を脅威する外界である。しかし彼等は、その祖先の通過した跡を辿ることによつて安全にその目的地に到達することが出来るのである。かれら子孫は、只祖先の足跡たる道を歩みさえすれば、不思議にも目的地に行くことが出来、生活が可能とされるのである。それ故道は彼等にとつては不可思議的存在であると同時に恩惠的存在であつた。即ち直接的に感じられる神秘的な力のものでありし神なのである。

道はまた、かゝる恩惠的存在であるばかりではなく、外敵のために利用せられることによつて、恐る

べき存在でもあつたのである。あたかも今日、道路がわれ／＼の社會生活にとつて利益をもたらす存在であると同時に、またそれは犯罪者や外敵の進入を或は逃亡を容易ならしめる存在であるのと同筆法に於いて、上代人に於いても恐ろしき力のものであつたのである。この何れにしても、道が集團的所産であり、集團的關心物であると云ふ意味に於いて神とされてゐるのである。

四

道德の場合に於いても同様に、大言海が説明してゐた如く問題たるべき中心概念は「ミチ」であり「チ」である。神道、換言すれば神ながらの道、或は聖人の道、武士の道などと云はれ、條理規範を意味してゐる。前に引用した萬葉集の歌の「世ノ中ノ道」とか

丈夫ノ行クト云フ道ゾオホロカニ思ヒテ

行クナ丈夫ノ伴

と云ふように道德は「チ」である。それは、集團的所産であり、集團的關心事であらねばならない。われ／＼の道德には指名し得る處の發案者も發明者もたない。われ／＼は、祖先の社會生活に於いて行つて來た處の足跡をばたゞ模倣するときわれ／＼の生活が容易になし得られることを經驗してゐる。祖先の行を再演するとき、社會は秩序を保つて行くことが出来るのであつて、若し誰人かゞ祖先の足跡を辿ることを肯じないならば、人間の社會生活は混亂し不都合を惹起しなければならぬ。

それ故、反社會的行爲が反道德と云ふことが出来る。即ち、道德は社會存在のためのものである。道德の遵守は社會秩序の保持である。

非難によつてか、制裁によつてか、何等かの方法によつて社會は道德の名の下に個人を拘束し強要する。此の社會の本有する道德的秩序的力は、實際に於いて、形而上學がとつて代るまでは神の命乃至は神の力と思惟せられてゐたではないか。此れと同様、道路が社會的所産であり社會的關心物である場合、道路も當然尊重されねばならない。上代人は既述の如く、自分等の道路を神として尊重し信仰した。従つて、道路の破壊と云ふこと、背神行爲であり神罪の行爲とされた。例へば、祝詞大祓の中に出て来る田畑の畦の如き小徑を破損するが如き行爲は、神の名に於いて天津罪として規定されてゐた。されば、此れを蹂躪したスサノオノミコトは高天原から根國へ追放されるの餘儀なき結果を惹起してゐる。この道破損に對する刑罰は祖先の足跡を破棄するものであると云ふ意味と、それにも増して社會生活に不都合を惹起せしめるものであると云ふ意味に於いて、集團自體が神の名によつてその保持を強制した現象形態に外ならない。

次は、宗教がその嘗ての偉力を減じて來ると、別言するならば、宗教と法律、宗教と道德など、分化して來ると、道德によつて或は法律によつて、道路は保持され支持されることになる。即ち、今日に於いては、道路は神の位をおりて人間界に下り、道路あらねばならぬの前提下に、道路はそれ自體のための道德と法律を要求してゐる。道路は神の衣を道德の衣にぬぎかえて、自らの存在を確保せんとするの

である。道路道德、道路法の出現之である。

以上すべて、道路と道德がともに「チ」に値すること、従つてそれらの集團性を強調して來たわけであるが、次には道德と道路との關係或は道路と人間精神生活との關係に一べつを興へよう。

五

今更新らしく申すまでもなく、道路と社會生活とは一體的相關々係をもつてゐる。社會は道路を作り、道路は道德を作ると云ふことも出来る。この原則はあらゆる場合に適用されることが可能である。宗教的、經濟的、政治的、軍事的その他種々なる社會的必要は道路を作る。或は社會的必要は道路を作ること改良することを禁止することもあり得る。これ、道路はその文化の表現であり、その文化の尺度なりと云はれる所以である。あをによし古き都はゴバンメ式の道路を形成し、玉の井はトホリメクレマス式の曲折的小徑を作ることになる。而もそれらは、それに特有の道路道德をもつてゐるらしい。

かゝる關係も古い歴史に資料を求めて考察することは興味ある問題である。一般の交通史家や道路研究者が云ふが如く、徳川時代の道路は立派でなかつた。積極的改善の考慮が拂はれてをらず、むしろ道路を以つて一種の困つた存在であるかの如く支配者には考へられてゐたらしい。しかれば何故、徳川時代に於いては道路に善意の考慮が拂はれてゐなかつたか、この原因の究明は、今われわ

れが問題としてゐる道路と道德との關係に對して重要な説明を與へてくれることになるであらう。徳川時代は所謂封建社會組織であつた。各領主は自國領土内に於いて自給自足することが守則となつてゐた。此れは封建社會が武士支配の社會であつたのにもかゝらず。此の社會は農業に依存してゐたからである。元來、農村經濟なるものは自給自足經濟である。或地方に飢饉があり、同一年に他の地方は豊年と云ふ現象があつたとしても、或る地方はミス／＼饑死しなければならなかつた事例を想起すれば、このことが理解されよう。

この如く、自給自足することをその鐵則とし、時には否常人口の移動を嚴禁してゐた封建社會組織、しかも軍事的な目的から道路の四通八達を阻止してゐたこの時代に於いては、道路は今日ほど重要性をもつものではなかつたし又實に困つた存在でさえあつたのである。一體、道路發達の歴史をみるに、道路が發達したのは即ち道路八達の必要をもつたのは、實に農村經濟組織が商業經濟組織へ轉換したときからである。言葉を換へて云へば、道路が積極的に考慮され改良され發達したのは實に商業の發展と同時である。西歐に於いても、道路が眞に日常生活の上に重要意義をもつたのは都市國家の出現からである。これを今日に於いても、農村よりも商業都市に於いてヨリ道路が四通八達してゐるのを見ればわかる。即ち商業の繁昌が今までの道路とは異つた意義の下に多くの道路を出現せしめるに至つたのである。

元來、商業はその性質上、無有相通じ、自由に交通することを原則としてゐる。封建的鐵則の下にあ

つた自給自足的經濟に於いては、既述の如く道路に關所を設けて人間及一般物資の通行を嚴重に監視してゐたが、かゝる制度は自由交易、自由交通を生命とする商業經濟には打破されねばならないものであることは、餘りにも事理明白であらう。商業經濟に立脚した明治政府が、封建政府を打倒して先づなされねばならなかつた仕事の一つは、實に關所の廢止、道路の改良建設であつたことは當然のことである。

われ／＼は以上、社會に二つの型のあることを見た。そしてその異なる二つの型の社會は、當然に必然的に道路に對する異つた二つの型をもつてゐることを見た。故に、われ／＼はこれらに對應する道德を檢討しなければならぬ。

六

封建社會の特性として、道德は面識社會的である。もつと嚴密に云へば、封建道德は上下の道德、即ち君臣、父子、夫婦の道德である。それは縦の道德であつて、横の道德ではない。ところが、この道德と封建道路とが全く一致してゐるのである。

既述したが如き封建社會の必要からして生れた道路は、今日の如く社會的交渉の舞臺とはなり得なかつた。男子門を出づれば七人の敵ありと思へとか何んとか云ふ悲壯な決心が必然的に必要とされたのである。此の悲壯な覺悟を必要としたと云ふのは、道路道德、即ち横の道德が發達してゐな

かつたと云ふ證明である。封建道徳は實に血が出るほど嚴格であつたと云はれるけれどもそれは近親間の道徳のことであつた。それ故また社會そのものが道路の發達を阻止してゐたかたちであつたが故に道徳は道路に於ける社會的な道徳を醸成すべくもなかつたのである。

然るに、商業時代に於いては道路が四通八達し、必然的に見も知らぬ他人が往來するやうになる。日常生活に於ける人々の他人との接觸度及び接觸面が擴大し増加することになる。そこで、今まで履行して來たところの近親間の道徳或は上下の道徳と云ふものでは日常の社會生活が圓滑に行かなくなるとは當然であらう。こゝに、今までなかつたところの、否、嚴密に云へば今までは極めて無意識的であり放任的であつたところの横の道徳對等の道徳が必要になつて來る。われ／＼の日常生活に於ける社會的交渉の舞臺が家庭内적であるよりも、更により多く家庭外적となつたのである。これ一に道路の演ずる役割に外ならない。

農村經濟から商業經濟へ、それは私的道路——私的と云ふのが惡るければ領内とか家庭的とか云つてもよい、更に面識的と云ふが當つてゐるかも知れない——から天下の公的道路への展開であり、それはまた私的の道徳から公的の道徳への一大發展を招來し且つ意味してゐる。旅の恥——公的道路上に於ける失態——はかきすてと云ふ淺間しき考へは必然的にわれ／＼の道徳には通用しなくなる。

かくの如く、歴史的にわれ／＼に大きな道徳的變化を與へた道路を肯定するならば、更に今日の道路がわれ／＼の精神生活に與へるところの何らかの影響が考へられないでもない筈だ。換言すれば道路の改良と云ふことに就いても何處とか暗示を受けることがあるように考へられる。即ち、こゝに――此の場合道路の量的方面はしばらくをいて――質的な道路の改良が種々なる動機に基くにもかゝわらず、道徳的理由を第一としなければならぬと云ふ主張がなされるのである。論語の雍也第六に

子游爲武城宰。子曰、女得人焉爾乎。曰、有澹臺滅明者行不由徑。云々

と云ふ一句があるが、此の「行フニ徑ニ由ラズ」と云ふ子游の例へば澹臺滅明と云ふ男が極めて公明正大の徳を具備してゐることを示さんとしたものである。此れを換言すると、小路や捷徑を利用するものは小人であつて、決して君子と云ふことは出来ないことである。例へば實際問題に就いて見ても、銀座の大通りを通行する場合に於いては道徳的たらざるを得ないであらう。勿論銀座街頭に於いても泥酔漢がハスカイに漫歩すると云つたダラシナイのを發見することもあるが、しかし小徑に比較してかく不道徳であり得る率は少い。常人の場合、大道はダラシナイ姿をしては往來し得ないが、裏小路では女でも赤い××にエプロンかけて横行する可能性が非常に多い。こんなことが子游をして叙上の例を引かしめたのであらう。然し人或は反駁するかも知れぬ。と云ふのは、人が大道は道徳的に立振舞ふことが良心的に強要せられ、裏小路はダラシナクあり得ると云ふ原因は、

決して道路そのものゝ性質に依存するものではなくして、交通量の問題だと云ふだらう。即ち、人の目が多いか少いかの問題だと云ふのである。勿論その主張は正しい。然しそれが凡てではない。只單に人目の數が問題だとするならば、それは既述した「ミチ」の性質を眞に理解したものだとは云へない。

社會に遠慮すると云ふことは、單に現在動く人目を憚ることだけではない。現在の人以外過去の人も憚ることがそして未來の人も憚ることが包まれてゐる。道路は社會的所産であり従つて社會的存在であること、更にまたそれは神と崇められたと云ふ意味を以つて社會であることを想起すれば、單に人目の數のみが問題ではないことに氣付かれるであらう。例へてみるならば、われ／＼がよく裏小路で發見するものであるがトリキを書いた板片の存在の如きは之を最もよく證明してゐる。立小便無用と書いた制札は効果が無いが、此のトリキは今なほ立小便禁止のためにその効果を擧げてゐるが如きである。此の場合、動く人目があるかないかは問題にはならない。それが効果を擧げ得てゐるのは、實にわれ／＼の精神に潜在してゐる宗教意識の發動によるものである。換言すれば、自分の社會意識による自制なのである。

かく解釋するならば、大通りに於いては立小便が不可能であり、小路に於いては立小便が容易であるのは、大路は小路に比較してヨリ社會的だからであると云ふことが是認されるだらう。人間の心は一般に、ヨリ社會的なものゝ方に社會的なものよりも敬畏を感じるものである。例へば無名の

二等兵と乃木將軍とを比較した場合、その國に盡す心に變りはあらう筈はないにも不拘、乃木將軍の方に對してヨリ敬畏的であり關心的である。これは乃木將軍の方がヨリ社會的國家的だからである。然らば、この社會的とは如何なる意味か。特に比較級に云ふ場合に於ける意味を解明してをかなければならない。大路は小路よりヨリ社會的であると云ふことは、先づ交通量の問題として考へられることは御承知の處であるが、此の大路小路をかく量的方面から見ないで質的方面から見ることが必要である。此の意味は小さくても立派であるか立派でないかの問題である。即ち、立派であるためには、立派でないよりもヨリ多くの人間價値の投入を必要とする。この場合ヨリ社會的と云ふことが出来るのである。言葉を換へて云へば、ヨリ社會的であると云ふことは、ヨリ人間價値を投入したことであり、ヨリ人間價値を投入すれば即ちヨリ立派であり完備したものであり得るのである。従つて、ヨリ人間價値を多く持てゐるが故に、人はそのものに敬畏を感じるのである。

かゝる人間の精神作用の一般的原理を理解するならば、道路改良に對して莫大な經濟的出費をしたことが、單に軍事、政治、經濟上の利益たるのみならず、道德的効果或は道德それ自體のためにも寔によろしき結果をもたらすものなることを認め得る。

八

私は以上の觀點から、道路美化、道路愛護、道路改良を主張せんとするものである。此れらの具體案に就いては何れ稿をあらためて述べたいと思ふ。